

四頭茶礼にみる飲茶の意義

中村 修也*

The Consideration of Drinking Tea in the Temple Ceremony “Yotsugashira”

Syuya NAKAMURA

概要 現代において行われている四頭行事の概要を、鎌倉の円覚寺、京都の東福寺において検証し、さらに四頭茶礼については建長寺の例も見た。その結果、これらの四頭茶礼が、室町時代の「喫茶往来」に描かれた茶事とほぼ共通していることを確認した。さらに、「喫茶往来」の茶に現れた四種十服は「太平記」の百服茶と同様であることも確認したうえで、両者が室町期の一般的な喫茶との共通性をもっているという学説を紹介した。これらの茶礼が行われる禅院の清規について検証すると、清規が禅院の典型的な生活規範として絶対的な存在感を持っていたことを確認し、そこで実は喫茶が大きなウエイトをもっていることを認識した。また鎌倉時代から禅宗は日本各地に広まり、禅院の影響力が大幅に力をもっていたことがわかった。そして、なにゆえ禅院で喫茶が取り入れられたのかという点については、実はお茶が栄養に偏りのある禅院での栄養補給材料となっていることを明らかにした。

一、現代の四頭茶礼

現在でも、建仁寺・建長寺・円覚寺・東福寺などの禅院では開山忌などに四頭茶礼が行われている。^①

この四頭茶礼についての辞書的な説明は次の通りである。

四つ頭の茶会【よつがしらのちゃかい】

建仁寺で開山栄西の生日を祝し、毎年四月二十日に設けられる、典型的禅院茶礼。方丈の正面中央に、栄西の像と竜虎の図を掛け、唐物の卓に香炉・花瓶・燭台を飾り、まず開山に献茶ののち、室中の左右に席をとる四人の正客と相伴に、茶を供するもの。四人の法衣をつけた供給僧が、正客より順次に、天目台に載せた茶碗に、あらかじめ抹茶を入れて配り、これを客にささげ持たせたま

ま、湯を投じて点茶してまわるもの。由来は不明だが、古い闘茶の様式をうけている。「柳田聖山」

とある。これは建仁寺を例に挙げているが、他の寺院でもほぼ同様である。いくつか別の例をあげてみよう。

まず円覚寺の場合は、「円覚寺開山忌 斎座『四ツ頭』の行事」とある。

◎方丈中央に開山仏光国師の画像を掲げ、靈膳をお供えして、この場に開山様が居られるが如く厳粛に会食する行事を「四ツ頭」と

*なかむら しゅうや 文教大学教育学部社会科学研究室

云い、かつてこの行事を一見された考古学者、三上次男博士は「宋代の古式礼法が化石の如く残っていると思う」と言われたように、中国より来朝した開山以来数百年、年々の開山忌に行われてきた古式の食事作法であり、客は真威儀に袈裟を着け、坐禪の姿で式中すべて無言、所定の合図により所作する。

◎四ツ頭とは、開山様の両脇・入口の両脇の「四人の頭」を中心に儀式を執り行う故に、そう呼ばれる。

四人の頭の座位に置かれてある布を座氈（ざせん）という。《この座氈は、元和四年（一六一八）円覚寺一五七世天甫和尚寄進の裏銘があり、四百年近く前のもの》

大衆和尚の座席の名札は座牌（ざはい）と云う。

◎先ず二人の座奉行（ざぶぎょう）が室中、中央前に進み、入口に向い、大衆和尚を呼び出す。これに応じて大衆和尚が入場して、各自の座牌の前に立つ。次いで『東班』都寺・維那『西班』首座・藏主の両班の和尚が入り、上方（じょうほう）和尚である管長猊下が入場する。

続いて侍真（じしん）が入る。侍真とは、開山真前侍者の意味で、この齋座の主人役を勤める。

◎侍真が中央前にて大きく一礼する。これを大問訊（だいもんじん）と云う。大衆和尚はこれに併せて問訊の礼をする。

次に侍真は、焼香・揖礼（ゆうれい）する。これは開山様に対して「これより齋座を頂戴いたします」と云う挨拶であり、大衆和尚はこれに併せ一礼し、着座して坐禪を組む。

最後に、侍衣・侍香の二侍者が入り、上方和尚の前にて立礼して、各位の席に着座する。

◎四人の給仕「供給」により配膳をする、四人の頭には直行、他は廻行して、食膳を置く際には、胡跪（こき）と云う片膝立の姿勢にて給仕する。

配膳が終わると、座奉行は食膳の点検をし、几帳「小屏風衝立」を持ち退場する。

◎次に侍真は、左に進み出て大問訊する。これは「召し上がれ」の合図、大衆和尚は、これを見て生飯（さば）と云う餓鬼に施す飯を数粒取り分けた後、食事を始める。

◎供給は四人の頭に二ノ膳「温汁」を給仕し、大衆和尚には銀提（ぎんてい）を持って汁を注ぐ。

◎食事後の茶菓の座は食事の次第とはほぼ同様。茶菓は四人の頭には別々に給仕し、大衆和尚には茶は円盆、菓子は角盆にて給仕し、浄瓶（じんびん）にて湯を注ぎ、立礼にて茶をたてる。

とある。これはとても詳細に当日の式次第が説明されたものである。

次に、東福寺の例も見ることにする。「方丈齋筵（四頭）」によると、

四頭出席者は、前もって方丈渡り廊下正面の「方丈齋筵図」に依って自分の位置を確認の事。

先ず侍薬が主位（唐戸口東）に西を向いて立つ。侍衣は道具衣と大掛絡にて縁上に立ち、蒙堂（*蒙堂とは法階が座元未満の者）下位より塔主迄叫出（両序は挙さず）各々侍薬と問訊して入室、定位に立定。次に両序（役者・後版・前版・参暇・維那・都寺の順）が各々侍薬と問訊して入室、定位に立定。了じて侍薬は身を轉じて賓位（唐戸口西）に東向きに立ち、侍衣は引き続き西堂下位より東堂・前住・再住・歴住と順次叫出、各々侍薬と問訊して入室、定位に立定。

此の時、威儀は真威儀又は本威儀也（出頭衣に着袈裟）

次に住持が侍薬と問訊して入室し、先づ主對に向い（座中上位）問訊して小低頭。次に賓對上位に至って問訊して小低頭。合掌を捨てず、主位に至って立つ（坐氈を取り傍らに置き、四頭座に附

き、皆同じくする。是に於いて侍衣が唐戸正面中央より三歩入りて胡跪、中啓を廻すこと一匝。この時、一衆合掌して着座。座つて直ぐに座牌を引き座の右に置く。次に侍衣が入り卓前に至り点燭して出で去る。侍香が唐戸正面中央より入り三歩進んで問訊し、一衆之に合わす（是れ一座の問訊也）。侍香は又手にて前卓の前に至り左手で香を熱却す（一座の香）。続いて中央卓前に到り炷香（左手）。了つて直ちに胡跪して香盒を置き、三歩退いて合掌して小低頭、一衆之に合わせて合掌。侍香は直ちに出で去る。（上の如き一座之香《自身の香は右手で焚き、代理の香は左手で焚く》は南陽和尚日記に據る）。次に侍衣始めの如く卓前に進み滅燭して出で去る。次いで侍香・侍薬が唐戸口に相並び侍香は西方より三歩入り右に少し斜めに成り合掌、住持の前に至つて大低頭して自位に至り、着座して座牌を引く。侍衣が入室して空位の座牌を取め（東北隅より南に転じ、西に至り西北隅に至る）出で去る。次に奉行座頭屏風を引き、次に座具之礼（一衆座具を折り念珠を添えて右脇に置く）次に出膳。供給の雲堂衆四員が入室し先づ両足を揃えて後、客前に進み胡跪にて膳を出す。了つて立ち出で去る。すぐに一度目の汁（蓋無し）を廻す。飯碗の蓋で汁を受け、一衆主位に従つて箸を取り、生飯をとつて食べ始める。供給の雲堂衆は二回目の汁を廻す。次に湯器（蓋付）が二回廻る。雲堂衆供給の時、主位が箸を置けば皆合わせて置く。食べ了つて主位箸を取め、一衆之に合わす。直ちに膳を引き菓茶を出す。四頭には同時也。四頭之外は菓茶別々に菓臺丸盆を用いて出す。引く時も亦た同じ。湯瓶・茶釜を持ち茶を点ずる。齋了り侍衣が縁より低頭。是の時、一衆座具を着ける。住持は一衆に先だつて室を出で、一衆之に従つて出で去る。

円覚寺の場合も、東福寺の場合も、四頭は長い儀礼と食事の後に、

最後に茶菓の儀式がある。それは太字で記した部分である。ある意味、こちらはいたつて単純である。建長寺については佐藤留実氏による詳細な紹介があるので、四頭全体については省略するが、茶礼についてだけ引用すると、次のようになる。

続いて、茶菓の座となる。最初に供給は「四ツ頭」の一人ひとりに対し、縁高に入った菓子（三鱗文などの打菓子と落雁一つ）と天目台に載せた天目を同時に持出す。次に、菓子が入った縁高六個（人数により変わる）を長盆に載せ、大衆に配り終えると、座見は座屏を元の位置に戻す。この時、入口側が山水、席側は花鳥の絵柄となる。その後、菓子の検分が行われ、侍真の所作により、一同合掌。供給は丸盆に載せた抹茶の入った天目六碗（人数により変わる）を運び入れ、大衆は隣同士でそれぞれ揃つて取り込む。

いよいよ、点茶がはじまる。供給は左手に浄瓶、右手は浄瓶の口先に組んだ茶筌を持って、再び登場。供給は立ったまま点茶をするため天目は台ごと差し出してもらう。そこへ湯を注ぎ、浄瓶を持った左腕で右袖を押さえながら茶筌を振る。この所作こそ、いわゆる「四ツ頭茶礼」の独特な風景であろう。そして、次の人の茶が点つた時に菓子を食べ、天目台を持って茶を喫する。残った菓子は包んで袂たもとに仕舞う。

さて、一同が茶を喫した後、四ツ頭の天目と菓子器が下げられ、大衆は供給の持ち出した丸盆と角盆にそれぞれ天目・菓子器を返す。その際、隣り合う二人が同時に供給の盆に返すのは、受け取るときと同様である。最後に侍真の終了の所作により、一同合掌。

① という次第である。四頭に付属する茶礼は、

供給が左手に浄瓶、右手は浄瓶の口に添える。

- ② 客には抹茶の入った茶碗が配られている。
 ③ 供給はお客の茶碗に浄瓶から湯を注ぎながら、右手で茶筥を振るって茶を点てる

という動作をする点において共通しているといえる。

そして、この供給の所作が室町時代の『喫茶往来』に描かれた喫茶法と似ていることは多くの先学が指摘するところである。³⁾

二、『喫茶往来』の茶

まずは、その共通する箇所を『喫茶往来』から抜き出してみよう。

茶壺各梅尾高雄之茶袋。西廂前置式対之筥棚。而積種々珍菓。北壁下建一雙之屏風。而構色々懸物。中立鐘子而練湯。廻並飲物而覆巾。会衆列坐之後。亭主之息男献茶菓。梅桃之若冠通建蓋。左提湯瓶。右曳茶筥。従上位至末坐。献茶次第不雜乱。茶雖無重請。敬数返之礼。酒雖用順点。未及一滴之飲。或四種十服之勝負。或都鄙善惡之批判。非啼催当坐之興。将又生前之活計。何事加之。廬同云。茶少湯多則雲脚散。茶多湯少則粥面聚云々。誠以有興有感。誰不翫之哉。而日景漸傾。茶礼将終。則退茶具。調美肴。勸酒飛盃。

【訓読】

茶壺はおのおの梅尾・高雄の茶袋（あり）。西廂の前に一對の筥棚を置きて、種々の珍菓を積む。北壁の下には一雙の屏風を建て、色々々の懸物を構へる。中に鐘子を立て湯を練る。廻りに飲物を並べて巾を覆ふ。会衆、列坐の後、亭主の息男、茶菓を献ず。梅桃の若冠、建蓋を通ず。左に湯瓶を提げ、右に茶筥を曳く。上位より末坐に至る。献茶の次第は雜乱ならず。茶は重ねて請ふこと無しと雖も、数返の礼を敬す。酒は順点を用ゆと雖も、未だ一滴の

飲も及ばず。或は四種十服の勝負、或は都鄙善惡の批判。ただ当坐の興を催すに非ず。さてまた生前の活計、何事か之に加へん。廬同云く、茶少くして湯多ければ則ち雲脚散す。茶多くして湯少ければ則ち粥面聚すと云々。誠に以て興有り、感有り。誰か之を翫ばざるや。而るに日景漸く傾き、茶礼将に終らんとし。則ち茶具を退け、美肴を調へ、酒を勧め、盃を飛ばす。

『喫茶往来』については、室町時代初期の著作ということがほぼ認められており、魚住惣五郎氏によると、一般の往来物が正月から十二月までの往復書簡で世間一般の常識を授けようとするものであるのに対して、『喫茶往来』は「特に茶道関係のもののみ」であり、「茶会の模様が詳細に書かれていて、茶に対する上層社会の考え方の変遷を見ることが出来る」ものであるという指摘がある。⁴⁾そして魚住氏は、『喫茶往来』に「四種十服」とあるのは、『太平記』の百服茶に通じるものであり、茶は南北朝期には茶の品種を当てる闘茶として流行を見て、「遊戯の一面にのみ墮した」とし、建武式目でも茶寄合の群飲佚遊を厳禁していることを指摘したうえで、

喫茶往来に描写された茶会の様子とこれら太平記等の記述とはよく相似している。さきに掲げたこの往来の第一状（掃部助氏清から弾正少弼国能への書状）のごとき、点心から点茶、さらに茶礼後の酒宴と進む唐様茶会の次第や、また茶亭の装備は何としても室町時代初期の姿と見なければならぬ。

と述べている。面白いのは、魚住氏は、『太平記』における闘茶の流行、建武式目における禁制などを指摘して、さらに茶の産地が梅尾や宇治から駿河にまで広がったことまで指摘しながら、室町時代に喫茶がどれほど流行したかについては明言を避けている。

たとえば『喫茶往来』の第四状は茶の批判に対する返事であるが、「その批判を見ると、実質的な内容もなく、ただ優雅な閑文字をつらねた抽象的なもの」とし、往来物という形式についても、「この喫茶往来も武家間の往復書状の形式ではあるが様式は公家の類型化したもので、漢文とも和文ともいえない特異なものであった」と否定的な表現を取っている。

これは、実態的な喫茶流行の歴史史料がなかったため、往来物と文学だけで喫茶の流行を主張するのに躊躇されたため、消極的な態度となり、問題となる点を自ら指摘しておくという手法をとったためである。

村井康彦氏は、『喫茶往来』と『太平記』の茶会の記事と禅院の清規における茶礼の様式がほぼ同じことから、『喫茶往来』の記事は、当時一般の茶会のあり方を示したものと受け取ってよいであろう」と積極的に主張する⁵⁾。

ここで、その『太平記』巻三三の記事を確認しておこう。

また都には、佐々木佐渡判官入道々譽を始として、在京の大名衆を結で茶の会を始め、日々寄合活計を尽すに、異国・本朝の重宝を集め、百座の粧をして、皆曲录の上に豹・虎の皮をしき、思々の段子・金欄を裁きて、四主頭の座に列をなして並居たれば、ただ百福莊嚴の床の上に、千仏の光を双て座し給へるに異ならず。異国の諸侯は遊宴をなす時、食膳方丈とて、座の圍み四方一丈に珍物を備ふなれば、それに劣るべからずとて、面五尺の折敷に十番齋羹・点心百種・五味の魚鳥・甘酸苦辛の菓子ども、色々様々居双べたり。されば、その費幾千万と云ふ事を知らず。飯後に旨酒三献過て、茶の懸物に百物、

ここにいう「四主頭の座」が四頭茶会に相当するのである。

『太平記』の茶も『喫茶往来』の茶も、ともに室町時代の茶を表現したものであることは間違いない。それをどのように評価するかが問題である。村井氏は積極的に評価する立場で考えている。

わが国の場合いわゆる禅院茶礼は鎌倉中期、十三世紀の半ばころにはじまったと考えたい。さすれば、『喫茶往来』にみる茶法は、こうした禅院茶礼が、寺院のわくをこえて一般化したものと言いうことができるし、そしてわたくしは、それが茶禅一味ということの歴史の意味であったと思う。

と考えている。村井氏のこの論考は、茶礼の変遷過程を追うことに主眼があった。結論的には、禅院の茶礼が一般の茶会の原型であり、唐物莊嚴も禅院の僧侶によって唐物が重視されて招来され、それが飾られたことに端を発していると述べている。

つまりは茶礼が主題であって、茶の普及に関しては論究されていない。「寺院のわくをこえて一般化した」というのも、茶の湯の流行を指すものではなく、その茶礼のことに限定されているのである。

では、実際の喫茶はどの程度一般化していたのであろうか。あらためて鎌倉時代に成立した禅院の清規について検討してみたい。

三、清規の茶

禅院の清規についても多くの論考があるが、今枝愛真氏は、「宋朝の禅院で行われていた喫茶法を伝えて、わが喫茶史のうえに新生面を開いたのは、ほかならぬ禅祖といわれる明庵栄西(一一四一—一二一五)である」として、『喫茶養生記』への批判はあるとしても、

当時中国禅林では後述のような『禅苑清規』十巻が最も主要な生活規範として使われていたから、栄西がそれを用いたという証拠は残っていないが、中国で各種の禅宗儀礼を学んでいるうちに、同清規にある茶礼などについても当然見聞し、あるいは体験してきたであろう、と思われるからである。

と述べられる⁶⁾。『禅苑清規』は宗頤が撰述し、序に崇寧二年(一一〇三)の記載があるものである。実在する最古の清規であり、今枝氏によると、「自給自足の集団生活を信条とし、もっぱら乞食行などの基本的な禅修行に重点がおかれ、信徒のための加持祈祷などを排除した、きわめて充実した内容を備えていたものであったから、その後の禅林の典型的な生活規範として絶大な影響を残すにいたっている」とのことである。

その『禅苑清規』には禅院の茶礼についても記述がある。たとえば「赴茶湯」には、

院門特為茶湯、礼数愆重。受請之人、不宜慢易。既受請已、須知先赴某処、次赴某処、後赴某処。聞鼓板声、及時先到明記坐位照牌、免致倉遑錯乱。

如赴堂頭茶湯、大衆集侍者問訊請入。隨首座依位而立。住持人揖、乃収袈裟安詳就座。棄鞋、不得參差、収足不得令椅子作声、正身端坐不得背靠椅子(後略)

当頭特為之人、專看主人顧揖、然後、揖上下間喫茶。不得吹茶、不得掉盞、不得呼呻作声、取放盞不得敲磕。如先放盞者、盤後安之。以次挨拶不得錯乱。右手請茶葉擊之、候行遍相揖罷方喫。不得張口擲入。亦不得咬令作声。茶罷離位、安詳下足。問訊隨大衆出。特為之人、須当略進前一兩步問訊主人、以表謝茶之礼。行須威儀庠序。不得急行大步、及拖鞋踏地作声。主人若送、廻身

問訊、致恭而退、然後、次第赴庫下及諸寮茶湯。

【訓読】

院門の特為の茶湯は、礼数愆重なり。請を受くるの人、宜しく慢易なるべからず。既に請を受け已らば、須らく先に某処に赴き、次に某処に赴き、後に某処に赴くことを知るべし。鼓板の声を聞かば、時に及びて先ず到りて坐位の照牌を明記し、倉遑錯乱を致すことを免れよ。

もし堂頭の茶湯に赴かば、大衆集り侍者問訊し請じ入らむ。首座に隨いて位に依りて立つ。住持人揖せば、乃ち袈裟を収めて安詳として座に就く。鞋を棄て、參差することを得ず、足を収め椅子をして声を作さしむることを得ず、正身端坐し背を椅子に靠らしむことを得ず(後略)

当頭に特為の人、専ら主人を看て顧揖し、然る後に、上下間を揖し茶を喫す。茶を吹くことを得ず、盞を掉かすことを得ず、呼呻して声を作すことを得ざれ。盞を取り放たんには敲磕することを得ざれ。もし先に盞を放かんには、盤の後に之を安んず。次を以て挨拶し錯乱することを得ざれ。右手に茶葉を請じて之を撃げ、行くこと遍するを候つて相揖し罷つてまさに喫す。口を張つて擲げ入れることを得ざれ。また咬みて声を作さしむることを得ざれ。茶罷つて位を離れ、安詳として足を下せ。問訊し訖りて大衆に隨ひて出づ。特為の人、須らくまさに略進前すること一兩歩して主人に問訊し、以て茶を謝するの礼を表わすべし。行かんには須らく威儀庠序なるべし。急行し大步すること及び鞋を拖き地を踏みて声を作すことを得ざれ。主人もし送らば、身を廻らして問訊し、恭を致して退き、然る後に、次第に庫下及び諸寮の茶湯に赴け。

とあり、茶湯に赴く際の心得が定められている。しかし興味深いのは、

茶湯に関する規定はこの箇所だけではなく、各所に見いだせることである。

清規に茶湯に関する規定が多いことは、『勅脩百丈清規』の目録をみても容易に理解できる。すなわち、

卷上

住持章第五

住持日用

告香

受嗣法人煎点

請新任持

專使特為新命煎点

新命辞衆上堂茶湯

專使特為受請人煎点

受請人辞衆陞座茶湯

入院

山門特為新命茶湯

卷下

両序章第六

方丈特為新旧両序湯

堂司特為新旧侍者湯茶

方丈特為新首座茶

新首座特為後堂大衆茶

住持垂訪頭首点茶

両序交代茶

入寮出寮茶

頭首就僧堂点茶

大衆章第七

方丈特為新掛塔茶
赴茶湯

節臘章第八

新掛塔人点入寮茶

方丈小座湯

方丈四節特為首座大衆茶

庫司四節特為首座大衆茶

前堂四節特為首座大衆茶

旦望巡堂茶

方丈点行堂茶

庫司頭首点行堂茶

この『勅脩百丈清規』は、今枝氏によると、南北朝の五山では「大いに歓迎され、たちまちのうちに五山禅林全般に普及して、五山を風靡してしまった」とのことである。そして『勅脩百丈清規』の影響を抜きにしては、南北朝中期以降の五山を考えることは出来ない」ほどであったと述べる。それほどの影響のある清規に茶湯がかくも多く登場することの意味も考えなければならぬであろう。

これについては、早くは福島俊翁氏の指摘がある⁸⁾。つまり、「実に禅林の礼では茶湯が最も重く、点心とか、齋飯、湯果、薬石に請ぜられても礼謝ということが無く、反つて茶の時には謝茶ということが教えられている」とあり、さらに「いま清規を通読すると大抵の法要儀礼応接管待には、必ず茶を奠じ茶を上り、茶を点じ、茶を喫し、茶に会し、茶に請ずることが記述されている」と、その茶にかんする記述の多さを指摘している。

この傾向は、『禅苑清規』から始まり、『勅脩百丈清規』に至るまで、ほぼ一貫した傾向である。禅院が喫茶を重視したことは欄津宗伸氏も指摘している⁹⁾。欄津氏は『大鑑清規』について、この清規を規定した

清拙正澄は『百丈清規』を制定した百丈懷海を尊敬しており、「日本化した禅修行を是正し日本に伝来していた南宋の禅風を育成するため」に『大鑑清規』を著し、「日本での実践を前提に中国の諸清規の規定を取捨選択して」成立させているので、そこに記された規定は、清拙が日本で実際に指導した内容と考えてよいとされる。そうしたうえで、『大鑑清規』にどれだけの喫茶に関する規定があるかを検討しているが、その規定だけを列記すると、次のようになる。

- (1) 掛塔における喫茶
- (2) 四大節における喫茶
 - ① 結制上堂・堂中三日点茶
 - ② 四節日巡堂礼
 - ③ 四節僧堂茶礼
 - ④ 秉私後管待
- (3) その他の年中行事における喫茶
 - ① 開堂祝聖・旦望巡堂茶
 - ② 仏祖忌・諸祖忌・開山忌・嗣法忌
 - ③ 二月八日大帝誕生規式
 - ④ 人事異動にともなう喫茶
 - ① 住持入院
 - ② 交代
 - ③ 諸山尊宿相訪
 - ⑤ 僧侶葬儀にともなう喫茶
 - (6) 茶器の管理

と、以上六項目において喫茶の記事を検討している。その結果、「中世禅宗寺院では年中行事やまた不意の出来事のなかで何かにつけて茶が喫されたのであり、きわめて大量の茶が消費される構造になっていたといえる」とし、他宗との比較において、「禅宗寺院では清規に規定されているがゆえに茶はなくてはならぬ存在であり、喫茶の持つ重

みが顕密寺院などとは明らかに異なった」と論じている。清規に記されているからといって必ず実施されたかどうかは不明であるし、清規を持たないから茶礼が行われなかったとはいきれない。その点においては欄津氏の指摘はやや一面的すぎるきらいはある。しかし、鎌倉・室町の禅院が中国の禅院の清規に憧れを抱いていたとするならば、かなり忠実に守られた可能性は否定できない。

鎌倉時代に禅宗が中国から輸入され、それが武家社会に広まっていった事実。また、多くの中国僧が来日し、多くの寺院の開山となっていた事実。さらに道元の「典座教訓」に見られるように、曹洞宗では「禅院の食事をつかさどる典座の職責の重要さと、典座の仕事そのものが、とりもなおさず自己の修行にほかならない」⁽¹⁰⁾ことが力説されたこと。鎌倉末期の称名寺では武家たちの間で喫茶による歓送迎会が盛んに行われ、茶を京都に無心するほどであったことが指摘されている⁽¹¹⁾。

こうした状況を考えると、「地方における喫茶の普及に関しては禅宗寺院の存在は非常に大きかった」という欄津氏の指摘は、おおげさではなく、首肯しうるものと考えられる。そして、律宗寺院の叡尊たちの活動をみる限りでは、禅宗だけではなく、他の宗派の寺院においても茶礼が行事に組み込まれ、喫茶が広く行われたことが想像できる。鎌倉時代の茶の普及は、我々の想像以上に、寺院の茶を基本として全国的展開を遂げていた可能性がある。

四、寺院と茶の関係

禅宗寺院においては清規の規定により、茶が寺院にとって必要欠くべからざる存在であったとするならば、清規における茶の重要性はどこから生じたものであろうか。

なぜ、かくも茶に関する儀礼が禅院において多く規定されているの

であろうか。

考えてみると、中国の寺院、朝鮮の寺院の周辺の山では茶が植栽される傾向があった。日本においても高山寺はまさに梅尾の茶の産地であり、そのほかにも茶園・茶畑をもつ寺院はいくつか指摘できる。

現実に寺院と茶は深い関係にあることは否定しようがない。

もちろん、清規に茶の規定があるから、寺院では茶を必要とし、周辺の山々に茶畑を作るようになったのであろう。贈答にも茶が用いられたことは、その茶の必要性が高かったことを示唆する⁽¹²⁾。

では、その必要性の根本は何であったのであろうか。

ここで発想の転換を試みたいと考える。その材料の一つが日本の平安時代に行われた季御読経⁽¹³⁾に見える「引茶」である。

『山槐記』仁平二年（一一五二）八月二十二日条の記事を見ると、

廿一日癸未 天晴、午刻参内、春（季）御読経始也、

廿二日甲申 天晴、時々雨降、参内、引茶役四位頭成朝臣、五位

伊長、藏人憲定、非藏人家輔持土器土瓶等、臨刻限、茶不候之由、

行事小舎人為恐申上之、不足言、参内之後責出引茶了、不可説事

也、如然事非大事、行事藏人、出納、及小舎人可存事歟、南殿引

茶雑色源盛頼云々、晩頭退出了、

とある。この日、引茶が行われるということ、引茶役の頭成・伊長・憲定・家輔の四人が土器・土瓶等を持って、刻限に臨んでいる。記事は、茶が現れなくて困惑するという内容であるが、引茶役が土器・土瓶を持っていることに注目したい。

ここに見える土器が茶碗、土瓶が浄瓶に相当すると考えることができるならば、季御読経における引茶も禅院の茶礼と相通じる儀礼であったと考えられる。もつとも引茶の茶が抹茶なのか餅茶なのかで、茶の様子は変わってくるが、儀礼としては共通性を感じる。

さらに、『兵範記』仁平二年十月十二日の記事を見ると、

十二日癸酉 高陽院被行羅漢供、寢殿母屋中央立仏台三脚、奉懸

釈迦三尊、同東西棟分戸并障子面等、奉懸羅漢各八鋪、（中略）

備居饌物各九前「飯汁、小豆、茶煎、菓子二種、菜四種、窪坏物

二種、箸台并箸匕等前別如此、朱器見于前々記録、前一兩日調進

人請取之調進之」其棚下階居茶瓶各一口、手巾「置折敷」各一帖、

手洗椽各一具等、

とある。仏面の棚に備える饌物の中に「茶煎」（茶を煎った物）が入っている。「飯汁、小豆、茶煎、菓子二種、菜四種、窪坏物二種」という列記の仕方から見て、「茶煎」は食べ物として考えられている。ここでは飲み物ではなく、食べ物として意識されている。

また、『江家次第』巻第五「季御読経」（日本古典全集）の「上卿一人着南殿例」の割注に、

天喜四年。三ケ日毎夕座侍臣施煎茶。衆僧相加甘葛煎。亦厚朴

生薑等随要施之。紫宸殿所雑色等参上施件茶。於大極殿修時亦同。

但用茶器等見所例也。藏人式

とある。天喜四年（一一五六）の季御読経は三日間行われ、その夕座には毎日茶が出された。侍臣には「煎茶」が出て、衆僧には「煎茶」に加えて甘葛煎が出された。また厚朴や生薑等も必要に応じて供されたとある。これらの茶は紫宸殿つまり南殿にいる藏人所の雑色が参上して施すのであるが、施茶は僧だけではなく侍臣にも行われているのが注意を要する。そして僧侶には栄養補給のためであったか、甘葛煎・厚朴・生薑等まで与えられている。

茶に生薑等を加えることは、中国でも普通に行われていた。中唐の

王建の詩に生薑入りの茶が僧に供されたことが詠まれており、宋代の蘇轍の詩には「北方俚人茗飲無不有、塩酪椒薑誇満口」と、さまざまな添加物が入れられている様子がみえる。¹⁵⁾

もちろん平安時代の日本人は、茶は飲んでいた。液体のかたちで摂取していた。ただし、現在の抹茶や煎茶のように、茶のみを純粹に飲むという形態ではなかったといえよう。茶には甘葛煎・厚朴・生薑・塩・乳などが加えられて飲んでいたと考えられる。これは一種の食べる茶である。

守屋毅氏は人類の茶への接し方に「食べる茶」を指摘している。¹⁶⁾ 守屋氏はタイ北部のチェンマイを調査し、ミエンと呼ばれる食べる茶の報告をしている。それによると、

市場のあちこちに、〈食べるお茶〉の売り場が盛大に店を広げておりました。店頭には、竹ひごでたばねられた〈食べるお茶〉が、山と積み上げられています。

という状況で、その食べ方については、

漬物になったお茶の葉に岩塩をちよつとそえて、口にほうり込めばいいのです。これが、もつとも簡単な食べかたです。すこし凝った食べかたになりますと、豚の脂身やナッツをそえることもありえます。そして、いつまでも、むしろむしろと味がなくなるまで、かみつづけるわけです。

とある。ナッツを添えるというのは沖縄のブクブク茶にも共通して見いだせる茶の摂取方法である。また、村井康彦氏も「東亜半月弧の茶」を紹介する中で、食べる茶に言及している。¹⁷⁾ 具体的にはチベット人の団茶である。

わたくしが見たのはインドに亡命したチベット人の建てたラマ教寺院の厨房においてであったが、そこではきのこ形の団茶を粉にして煎じたものを「チャイドム」という筒に入れ、これにチーズやバター、ときには玉子などを加えて攪拌し、茶碗に受けて飲むというものであった。このチベット茶はわれわれの感覚には耐えがたいほどの味と色であったが、乳製品を入れるのは、遊牧民族の必要と知恵によるものであろう。それが唐では乳製品でなく塩となるのは、農耕社会における変容であらう。

とある。このように茶を食物として利用している民族は現在も存在する。茶が本来食物であったならば、厳しい修行が必要とされ、かつ粗食を是とする生活が行われる寺院において、ある時期までは茶が重要な栄養補給の一つであったことは想像に難くない。

もしそうであるならば、寺院における茶は、本来、喫茶文化としてとらえるのではなく、食事文化として考えねばならない存在であると言えよう。そうしてはじめて、禅院清規の中の茶礼の存在が理解できるであらう。

日本に茶が伝えられた段階では、茶の意味はすでに食事文化としての意味合いは薄れていたかもしれない。しかし、明確に意識されていたかどうかは別として、平安時代の茶への添加物のあり方は、かつての食事としての茶の摂取方法のなごりを留めるものといえよう。

そして、この食事としての茶の摂取が、煎茶ではなく抹茶という茶そのものを飲む方向性を維持させた可能性を考えるべきであらう。

我々は、喫茶から茶の湯へという、飲食から文化への進化、作法の確立などに研究の主眼をおいてきた。それは一定の成果を上げつつある。その一方で、茶の食物性という「食事文化」の側面における研究を置き忘れてきたともいえよう。

これまで、茶の粉末化に関しては、漢方薬としての茶の効用ばかりが取り上げられ、他の面については閑却していた。それでは、茶が嗜好品となって以降も粉末の抹茶を飲み続けた理由が説明できない。茶の食事が認められて、初めてその理由に到達できるのである。もちろん、中世日本における抹茶の飲用は、あくまで食事性の名残にすぎないかもしれない。だが、その根源が「食べる茶」であったことは茶の分布や広がりを考える際に重要性を示すことになるであろう。

食べる茶がどれだけ直接的に中国禅院の茶礼に影響を与えたかは明確には出来ない。しかし、茶が喉の渴きを潤すただけならば、塩や乳や甘葛・生姜などを加える必要はない。また薬用であるならば、粉末そのものでいいはずである。①茶が粉末にされ、それが攪拌される際に、他の滋養物を加えて摂取されるという飲茶法をもつこと。②禅院においては食事そのものが修行に通じること。③また日常の食事が質素なものであること。この三つの要素を勘案した時、禅院において、行事の際に、栄養補給のために食事に茶礼が付加された可能性は大いにある。

行事の茶礼が儀式化すると、茶礼の本来の意味が希薄になり、さらに時代の変化によって忘れられていく傾向は否定できない。普段の食事がレベルアップすれば、栄養補給の必要性はなくなり、茶礼の意義が失われるのも自然の流れである。逆に考えると、中国の禅院では消えてしまった茶礼が、日本の四頭茶礼に残っていることが奇跡なのかもしれない。

そして、中国では品質への追及はあっても、合理的な飲み方として煎茶へと完全移行するのに対して、日本では抹茶が残る。それは鎌倉以降の政権を武士が担い、武士が禅宗に傾倒していったことと無関係ではあるまい。中国皇帝が飲酒、煎茶に傾いたのに対して、日本の権力者の武家は、禅院を手本に抹茶を認めつづけた。それが日本に抹茶文化を残した大きな要因であったと考えられる。

註

- (1) 林屋辰三郎他編集委員代表『角川茶道大事典』(角川書店、一九九〇年)
- (2) 佐藤留実「建長寺の開山忌と『斎座四ツ頭』」(『淡交 別冊 天目』五六号、六六頁、二〇〇九年)
- (3) 熊倉功夫『茶の湯』(教育社歴史新書、一九七七年)、村井康彦『日本文化小史』(角川選書、一九七九年)、永田尚樹「清規に見る室町時代の茶礼について」(『禅文化研究所紀要』二二卷、一九九六年)
- (4) 魚住惣五郎「喫茶往来 解題」(『茶道古典全集』第二卷、淡交社、一九五八年)
- (5) 村井康彦「茶徳と茶礼(下)」(『日本美術工芸』三四六卷、一九六七年)。
- (6) 今枝愛真「茶礼と清規」(『茶道聚錦2茶の湯の成立』所収、小学館、一九八四年)
- (7) 鏡島元隆・佐藤達玄・小坂機融『訳注禅苑清規』(曹洞宗宗務庁、一九七二年)
- (8) 福島俊翁「勅脩百丈清規 解題」(『茶道古典全集』第一卷、淡交社、一九五七年)
- (9) 棚津宗伸「大鑑清規と五山文学における喫茶の諸形態」(同『中世地域社会と仏教文化』所収、法蔵館、二〇〇九年)
- (10) 石川力山「解説」(中村璋八・石川力山・中村信幸『典座教訓・赴粥飯法』所収、講談社学術文庫、二六〇頁、一九九一年)
- (11) 熊原政男「鎌倉の茶」(河原書店、一九四八年)、熊倉功夫『茶の湯の歴史 千利休まで』(朝日選書、一九九〇年)、福原金治「鎌倉と東国の茶」(『テーマ展鎌倉時代の茶』所収、神奈川県立金沢文庫、一九九八年)
- (12) 中村修也「『大乘院寺社雑事記』にみえる茶史料」(『言語と文化』一四号、二〇〇一年)
- (13) 中村修也「栄西以前の茶」(『茶道学大系2茶道の歴史』所収、淡交社、一九九九年)
- (14) 高橋忠彦「唐詩にみる唐代の茶と仏教」(『東洋文化』七〇号、一九九〇年)。
- (15) 高橋忠彦「宋詩より見た宋代の茶文化」(『東洋文化研究所紀要』第一一五冊、一九九一年)。
- (16) 守屋毅『喫茶の文明史』三四～三六頁、淡交社、一九九二年。
- (17) 村井康彦『茶の文化史』(岩波新書、一九七九年) 一九～二〇頁。